

リンゴでつながる 地域と人

昼夜の寒暖差が大きい沼田市はリンゴ栽培に適しており、県内で最も大きい産地になっています。農業関係試験研究機関などで開発された県育成品種も、沼田の地で開発されました。秋の味覚の代表格として親しまれ、毎日の食卓に並ぶ家庭も多いのではないのでしょうか。私たちに笑顔を届け、地域を支えるリンゴの裏側に迫ります。



人気ナンバー1

10月下旬～11月上旬

ぐんま名月

多汁・香り・蜜入りよし

- ① 1991年
- ② 「あかぎ」×「ふじ」
- ③ 約350g、円錐形
- ④ 15%、0.2%



10月上旬

紅鶴

形良く酸味さわやか

- ① 2016年
- ② 「陽光」×「さんざ」
- ③ 約330g、長円形
- ④ 14%、0.3～0.4%

県限定生産のニューフェイス

- ① 登録年 ② 交配組み合わせ
- ③ 大きさ・形 ④ 糖度・酸度

2020年産の群馬県のリンゴ収穫量は6850ト(農林水産省統計)で全国8位、本市の作付面積は県内で最も多く約100畝を超えます。リンゴの王道「ふじ」をはじめ、県育成品種の「陽光」や「ぐんま名月」が栽培されています。近年では、程よい甘味と酸味のバランスが良いニューフェイス「紅鶴」(2016年登録)が育成され、「見た目がきれいで味も良い」と生産者から人気です。県育成品種は全8種類。8月下旬から11月までが旬で、全て市内にある県農業技術センター中山間地園芸研究センターで開発されました。

沼田地域では、昭和30年代から養蚕などに代わり、リンゴの生産を行う農家が増えてきました。現在、市内にある観光農園は約70軒。毎秋、リンゴ狩りにぎわい、県内外への贈答品やふるさと納税の返礼品としても人気があります。

一方、高齢化が進み後継者に悩む農家の対策が課題にもなっています。リンゴ全盛期の20～30年前に比べ、リンゴ農家数はおよそ半数にまで減少しています。このような中、リンゴ農家はどのような思いで栽培を続け、次世代へ受け継いできたか、また、リンゴを通じた学びや食の取り組みなどを特集します。併せて、さまざまな技術や加工を駆使して、国内外へリンゴの魅力を発信している生産者を紹介します。